



## 巻頭言

### いれ物となか味

尾上 守夫\*

最近の光ディスクの進歩は真に目ざましいものがある。この9月に、神戸ポートピアで第2回国際光記憶シンポジウムが開催されたが、その大半は光ディスクに関するものであった。2年前の第1回のときは追記型の実用化が始まったと言えるが、今年は書換え可能型の実用化の年と言えよう。光ディスク標準化委員会が行ってきた130mm光磁気ディスクの信頼性および互換性の試験も、参加した多数の製品がほぼ満足な成績を上げている。オーバーライト（重ね書き）やアクセス時間などの点でまだ及ばないものの、数百メガバイトから1ギガバイトをも越える大容量と着脱が可能なことは、磁気ディスクに比べて大きく優る点である。シンポジウムではすでに次世代をめざした研究が多く発表された。この分野における日本の研究は量、質ともに世界に誇れるものがある。外国人の参加も多かった。第1回のシンポジウムを計画したときに、この会議に出席しなければこの分野の現状がわからず、だまっていた世界から参加してくるような継続的な国際会議を日本につくりたい、と言った夢がだんだんに実現してきてうれしいことである。

1ギガバイトの容量といえば、大きな辞書や百科事典も十分収まる。トーマス・アクィナスの大部分の著作も収まるというから、相当筆まめの人でも一生に書く文書を全部入れることができる。それに健康手帳など、その人にかかわる情報を入れてもまだ余る。仕事あるいは趣味に関する情報を加えていっても大丈夫である。万一足りなくなれば、次のディスクに簡単に交換できる。それもパソコンで十分扱える。遠からずウォークマンのようなポータブルな機器も出てくるであろう。従来ビジネスやメインフレームの世界に限られていた大容量記憶が個人にも解放されたのである。人類の文化にとって、これは一つの革命ではなからうか。

ただ、整ったのはあくまで入れ物であって、なか味はこれからである。後世に問いたい労作もする人はいいが、大方は学生時代の成績など早く消えてしまったらいいと思っているであろう。そういった精神的あるいは心情的なことはさておいても、大量の情報の検索も含めた入出力は気の遠くなるような話である。計算機技術だけにまかしておいてよいだろうか。光技術は並列性を含めて多くの可能性がある。極度にしばったスポットで1本の溝を追うだけが能ではない。入れ物だけでなく、なか味についても光技術の貢献を期待したい。